
閃光の果てに ~ Little Memorys ~

武御雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閃光の果てに〜Little Memory〜

【Nコード】

N1759F

【作者名】

武御雷

【あらすじ】

西暦2102年：戦車や戦闘機に代わって2050年頃に誕生した二足歩行特殊戦術戦闘人機：通称：特戦機が各国の標準装備になっていた：その時ロシアと中国が世界に対して宣戦布告をした！そして世界をそして子供達を巻き込んだ泥沼とも思える戦争が勃発する！

第一章：序曲（前書き）

えゝ……とてもありそうな戦争小説ですが出来れば気にしないで見てほしいです……

では……閃光の果てにゝLittle Memorysゝをお楽しみ下さい

第一章：序曲

時は2050年……とある米軍兵器開発局の局員によりとんでもない兵器が開発された……その名も……

『二足歩行特殊戦術戦闘人機（略称：特戦機）』

である。

特戦機は全長18m、40m、重量50t強、多種多様の武装を装備し歩行速度200km以上、バックパックのメインスラスターによる飛行速度は2000kmオーバー、戦艦の主砲の直撃にも耐える重厚な装甲……この驚異的なスペックにより全世界の最新兵器は時代遅れの骨董品と化した。

そして2063年頃には特戦機は全世界の兵士にとって拳銃と同様に有って当たり前の兵器と化していた。

世界中の軍事産業はまるで冷戦時のアメリカとソ連の様に強烈な軍事競争を行い数々の特戦機や対特戦機兵器を開発していた……日本も例外では無かった……アメリカとの安保条約の撤退……日本国憲法の改正、再軍備……そして国名を大日本帝国と改名……。

しかし2085年……世界中を揺るがす大事件が発生した……ロシア、中国、韓国が同盟を結びヨーロッパ・西南アジア・北中南アフリカへ宣戦布告同時侵略を開始した。

準備がままならない欧州、アジア、アフリカは高度に組織化された露中韓同盟軍に敗走を繰り返し宣戦布告からたった2年で日本を抜かしたユーラシア大陸とアフリカ大陸全土を支配した。

それから15年が過ぎた頃特戦機は大いなる進化を遂げていた。

アメリカと日本が第五世代二足歩行特殊戦術戦闘人機を開発したのだ。

アメリカは『FZB-22ラプター』

日本は百式二足歩行特殊戦術戦闘人機『赤城』

を開発し従来使用されていた特戦機は時代遅れとなった。

何故なら

高いステルス性を持ち三世代機から標準化された特殊防御力場の能力向上、三世代機から使用可能だったが特殊な機体改修をしなければ使用出来なかった光学兵器^{ビームやレーザー}を無改修で使用可能になったりと画期的な進化を遂げ世界水準を大幅に凌駕した。

そして2102年…この世界大戦は泥沼化し少年少女達を巻き込んで行く……

『君は…生き残る事が出来るか?』

第二章：気迫（前書き）

第二章です

前の世界設定の説明から一転、特戦機により戦闘です。

どうぞ第二章をお楽しみ下さい

第二章：気迫

横浜国連軍特殊養成訓練校

ここは次世代を担う新米特戦機パイロットを養成する為だけの訓練校

横浜国連軍特殊養成訓練校 L-5 訓練区間

ここは校舎より五キロ離れた訓練区間。

このエリアは市街地戦を想定した訓練区間でダミービル等が所狭しと建ち並びここはその第五区間。

そして、今まさに二機の高等練習特戦機が訓練の真っ最中でありその中の一機のパイロットの少年こそがこの物語の主人公である…名前たかみち・しやうは高路昇。

年は15歳、身長176cm、容姿は中の上といった感じの少年、成績は座学、実技共に上位で常にナンバー1を維持しているが天性の才能を持ちながら努力を惜しまない努力家である。

そして忘れちゃいけないもう一機の機体が昇の戦友でありパートナーたかぎ・けんこの高城賢吾である成績は中の上位だが常に冷静を保ち戦況を瞬時に見極め戦術を立てる事が出来遠距離からの支援狙撃は天下一品。

この二人の少年がこの物語を作り上げて行く

「こちらトレーナーワンよりトレーナーツー…賢吾、そっちから教

官機が見えるか？」ダミービル内に身を隠しレーダーに目を配らせながら後方に位置する賢吾に通信を入れ尋ねて。

『ネガティブだ……多分五世代機特有のアクティブステレスが効いてるのとお前みたいにビルに身を隠してるからメインカメラにもレーダーにも全く反応しない』

モニターの一部にウィンドウが開き賢吾の顔が映し出され……いや、正確には丸みを帯びた物では無く角張ったパイロット用フルフェイスヘルメットを被った賢吾が映し出され強化防弾プラスチック製の黒っぽいアイガードから微かに見える瞳と口調から相手も同じだと
覚り

「了解した、お前は継続して警戒してくれ」

『了解……無茶しても無理すんなよ？』

「大丈夫だって……賢吾……背中には任せた」そう言つと賢吾は『任せろ』と一言言い通信を切りモニターからウィンドウが消え

「……さて……と……FCS（火器管制）を実戦モードに移行……
ジェネレーター出力80%に固定……よし……」

何かを決意したようにダミービルから身を出し短い銃身の先に長めの銃剣が付いた突撃銃を二丁腰ために構えバックパツクのバーニアスラスターを吹かしビルとビルの間を高速で低空飛行しまるで相手を誘うように爆音を轟かせ時速1000kmを超える速度でダミービル群を飛行していき。

一方教官機

「真っ直ぐ来るか……望むところだ！」

レーダーで昇の機体がダミービル群を高速で飛び抜けて接近してくるのが映し出され教官の日本人に眠る侍の魂に火を点け笑みを溢し、こちらも即座に火器管制を実戦モードに切り替えダミービルから身を出し目の前の広く長い大通りに出て腰部に装備された日本刀型の剣を地面に突き刺し昇が来るのを待ち受け

「……ッ！」

昇は大通りを高速で低空飛行していると前方に立ちはだかる教官機に驚き直ぐ様制動し機体を豪快に土埃を上げスライディングさせ。

「……タイマンのつもりかよ……よし、乗ってやるよ！」

『来い！ヒョッコ！お前に特別メニューを組んでやる！』

昇の機体は両手に装備された短銃身突撃銃を投棄し腰の日本刀型の剣を抜刀し構え教官機も剣を構え両機の構える剣がキイインと高鳴りし始め両機が構える剣は模擬刀等の類いではなく日本軍機のみが装備する高周波の振動で敵を切り裂く真正銘の実戦刀で大通りに対峙する二機の光景はまるで戦国時代の武将の様で。

一方賢吾は……

「…発見つと…随分面白そうな事になってんなあ…」
長距離狙撃用のライフルを構え教官機を何時でも狙撃出来る様に口
ツクオンし

「……………」

『……………』

「『……………行くぞおお！』」

二機が同時に踏み込み高周波振動する剣が交わり火花を散らせなが
らつばぜり合いをし

「『うおおおお！』」

両機一步も譲らず辺りには高周波振動する剣がつばぜり合いをし一
言でうるさいとしか表せない音が響き渡り

「クソ！」

これでは埒があかないと判断し一旦距離を取りまた睨み合う形になり

『……………予想以上だ…恐れや迷いが無い剣筋…見事！……………しかし、ま
だまだ青い！…ここからは超高機動格闘戦だ…』

教官機が突如身を低くし構えバックパックのバーニアスラスターが開き。教官が駆る第五世代機のバーニアスラスターは前世代機のお椀のような物では無くステレス性を考慮するため将棋の駒のような形をしていてお椀型より高い機動性を確保している……そのバーニアスラスターが開いたと言うことは間違いなくブーストをするか飛行をするに違いなく。

（超高機動格闘戦……世界で唯一日本製特戦機のみが可能とする戦闘方法……装甲関係無しの一撃必殺戦闘……多分教官もマジだな……）

「……よし！ジェネレーター出力120%まで上昇……各関節超伝導フィールドモーターのリミット解除……全システムをスーパードックファイトモードに移行……」

タッチパネルを操作し機体の枷を外し本来の能力を引き出し機体を教官機同様の構えを取り、両機の睨み合い……いや、我慢比べが始まり先に痺れを切らした者が負ける……日本らしい一対一の戦いのルール。

「はぁ……はぁ……」

コックピット内には昇の息遣いがうるさく響いてる様な静けさがあり機体前方を映し出す前面モニターには微動だにしない教官機があり。

（……クソ！……あの装甲の内から沸き上がる気は何なんだよ！……スゲー威圧感だ……）

教官機から伝わる気に相手が最前線で修羅場を乗り越えた強者なん

だと改めて実感させられ次第に嫌な汗が出てきて。

(…一か八か…)

機体の姿勢を更に低くさせた刹那バックパックのメンバーニアスラスターと脚部のサブバーニアスラスターをフルドライブさせ教官機に突っ込んだかと思われた次の瞬間丁度教官機が立って居た場所が丁字路になっていて教官機に接触寸前で一瞬制動を掛けて体勢はそのまま直角で丁字を曲がり。

「ッ！アイツ！」

教官はまさか曲がるとは思って居らず完全にはめられた状態で即座に追撃しようとしたが既に見失って居て更にコックピットにはロツクオンを警告する警報が鳴り響き。

「俺を忘れてたな……」

昇が曲がった丁字路は丁度賢吾が待機してる場所に一直線で繋がっていて更に賢吾の場所から教官の場所まで遮蔽物が無く教官は格好の的。

「……グッバイ……」

操縦桿のトリガーを引き狙撃銃からペイント弾が発射され教官機の胸部ブロック…要はコックピットハッチに当たりそして模擬戦の審

「マントボリス」
判役であるCPから…

『戦闘状況クリア…敵機コックピット及びジェネレーター大破を確認、友軍機の損害ゼロ、各機帰還せよ』

第二章：気迫（後書き）

第二章はどうでしたか？

まさかの結末に驚いた方も居るでしょう…正直書いた本人が一番驚き……（苦笑）

第三章：特務試験隊（前編）（前書き）

前の話の続きでござます。

かなり執筆に時間が掛かった……

時間があれば読んでくださあゝい……

後かなり専門用語が出て来てるのであしからず。

第三章：特務試験隊（前編）

横浜国連特殊養成訓練校二番格納庫

教官機が昇の罨にはまり賢吾の狙撃により撃破されと言う結果で模擬戦を終え機体を格納庫へと固定し機体から降りて

「……ヨッツシャアア！！」

昇は思わず格納庫に響く程の声で叫んで喜び

「やったな！昇！あの教官を落としてやったぜ！」

賢吾も喜びを隠せない様子で近付いて来て昇の背中を叩き

昇達がこの訓練校に入学し9ヶ月が過ぎた。

特戦機のパイロットになるには三年は掛かるがこの特殊養成訓練校では実技に力を入れ座学は特戦機の基本設計やスペックを少し教えるだけで後は『実際に乗って学べ！』と言われ問答無用で特戦機に乗せられる。

そして9ヶ月が過ぎると訓練校のメインイベントであるクラス分けがある。

大体この9ヶ月の間は二人の訓練生に一人の教官で教練していたが残り3ヶ月で全訓練生510人を50クラスに分け残りの10人は落ちこぼれ組になるらしいがそこは不明。

昇と賢吾もまたクラス分けの為の最終試験を先程作戦勝ちと言う結果で終えた。

「おい！昇！明日のクラス発表楽しみだな？」

「あのな……小学生じゃあるまいし……」

ウキウキワクワクしている相棒を呆れた顔をしながら俺はこれまた呆れた様に言っちゃった。

翌日

特殊養成訓練校大ホール

次の日俺と賢吾はクラス発表を見に大ホールへ向かった。

「うへッ……もう人が居るぜ」

俺達が来た時にはもう黒山が出来て居て俺の隣で賢吾が少し悔しそうに言った

（……こいつ……どんだけ気にしてんだ？）

「おい！昇！早くクラス見ようぜ！」

「ああ……」

賢吾に急かされ人混みをかき分けクラス分けが書かれた紙の前にたどり着き自分の名前を探し始め

「……あつた…え…つと…クラスは………X?」

俺は自分の名前を見つけると見知らぬ組があつた。

大抵は第一小队等と書かれているが俺の場合単にXとだけ書かれていた。

とりあえず俺は自分の名前を見つけたのだからと人混みを出ていき賢吾を待つことにした。

「よいしょ…ツと」

暫くすると賢吾が人混みから出てきた。

「どうだった?」

「それがよ…訳の分かんない組でよ、Xだってよ」

「賢吾!お前もか!?!」

賢吾の言葉に驚きを隠せずに尋ね、賢吾も驚いた様に頷いた。

「……とりあえずクラスに言って見ようぜ?」

俺はクラスに行けば何か分かるかも知れないと思い賢吾に提案し賢吾も俺の提案に頷いてくれた。

俺達は暫く歩きX組の教室へとたどり着いた…教室の雰囲気は特に変わった所が無く至って普通だった。

「よし、昇…入って見ようぜ？」

賢吾の言葉に頷いて扉に手を掛けの中に入った

『なんでそうなるのよ！？』

『だ〜から！美姫は踏み込みのタイミングが早いの！！』

『それを言うなら美奈だつて抜刀がコンマ3遅いじゃない！！』

……入った瞬間同じ顔で同じ体つきの少女二人が口論していた……とりあえず俺達は二人を気にせず空いてる窓側の最後列の机に向かい椅子に座り賢吾は俺の隣に座った。

何故最後列かと言うのは自分と賢吾以外の八人を観察し易くするためだ。

俺達が教室に着いた時には既に全員揃って居た。

そして暫くして女性教官が一人来た…本来は教官は二人で隊長、副隊長を受け持つ筈が一人しか来ていない、更に疑問なのが教官の軍服に付けられた階級をしめす肩章である…教官の階級は『少将』となっていた、普通は佐官階級の教官が隊長の筈だが教壇に立つ人物は更に上の將軍階級だった。

「よし…皆揃ってるな？」

女性教官は教室を見渡し皆が揃って居るのを確認した、先程まで口論していた姉妹…だろ〜二人は若干ギスギスした雰囲気を出しながら大人しく座って居た。そして教官の目線が俺の方に向けられると微かに微笑んだ様に見えた。

そして視線を俺から外して全体を見渡しながら自身の自己紹介を始めた。

「今日から君たちの教官と部隊長を任された南雲里奈なぐもりな、階級は見ての通りだ」

南雲隊長は自己紹介を終えると教室の皆に対して再び微笑んだ。

そして俺は何故俺に微笑んだのか理解した……いや……思い出したのだ（……なるほど……そう言えば居たな……父さんが隊長をしてた第00特務試験隊に……確か二番機だったか……）

そう……俺の父さん……たかみちみよし高路三良階級は中将……所属は大日本帝国特務海軍、アメリカで言うところの海兵隊みたいな物だ。

日本は2089年頃にアメリカとの日米安保条約を放棄し更に日本国憲法の改正を行い再軍備を行った……そして国防予算世界第二位の約7000億ドル（日本円で約84兆円、2089年当時の国家予算は1520兆円）の強国に登り詰めた、当時の各主要大国の国防予算は第一位にアメリカ……約9500億ドル、第三位にロシア……約6900億ドル、第四位に中国……約6000億ドルと日本は超大国と互角以上になっていた。

そして特戦機の運用が開始されると教導隊や改修機の試験を行う試験隊等が必要になり急遽設立されたのが第00特務試験隊『アベンジャー』だった。

そしてその部隊の隊長が俺の親父だった。

親父は日本で最初の特戦機パイロットで軍内外で知らない人はいないほどの有名人で部下の信頼も厚かった、だが2094年12月28日……アメリカ、日本、イギリスを中心とした連合軍はヨーロッパの地を解放するべく二回による上陸作戦を決行した……その先遣隊としてアメリカの第7強襲揚陸艦隊、第8強襲揚陸艦隊、第205強襲特戦機中隊、第882対特戦機特技兵大隊、第75野戦砲中隊と

日本の第一機動艦隊、第一護衛艦隊、第二護衛艦隊、第五強襲揚陸艦隊、第203航空隊、第一海軍航空隊、第二特戦機師団で構成した第一混成揚陸分艦隊として編成した……この数は先遣隊にしてはかなりの数だ……

そして、先遣艦隊はロシア、中国が最前線とするノルマンディーの海岸線に乗り込んだ。

そしてアイルランド、ポルトガル、スペイン、イギリス、イタリア、フランス、オランダ、ベルギーと次々解放して行った所で先遣隊は任務を終え本隊である第一強襲揚陸艦隊とバトンタッチするように撤退しそして第一強襲揚陸艦隊は来るべきロシア、中国侵行に備えドイツ軍のメッサーシュミットベビーインダストリー社製第4.5世代特戦機『Me v 262 シュヴァルベ』を一個大隊の六十四機と合流しドイツの首都ベルリンを目指し侵行を始めた……その第一強襲揚陸艦隊には第00特務試験隊も編成されていた。

そして2095年3月24日……連合軍は初の損害を出した……もちろん損害を受けたのはアメリカやイギリス等だけでは無い……日本も例外では無かった……そう……日本にとって最も無くしたく無かった部隊……第00特務試験隊が事実上の壊滅……

2095年3月24日時間11時25分ルクセンブルクドイツ国境
沿い

ジグザグな縦一列の隊列を組んで極静穏モードで低速歩行する部隊の先頭の機体が国境沿いで歩行を止め左腕部を上げ拳を握り軽く時計回りで腕を回し後ろの味方に停止する様指示を出す。

この先頭の機体こそ後の大日本帝国軍主力第五世代二足歩行特殊戦術戦闘人機『赤城』の試作機の試作機、実験機の実験機である試作実証実験型であった。

整備兵曰く『じゃじゃ馬だけど手懷ければ従順な少女』らしい。

だがその例えは間違つて居なかった。

何故なら試作実証実験機型の赤城は米国製第三世代機のスターファイターを接近戦を主体に再設計しライセンス生産した第四世代機の愛宕を各部間接の駆動モーターやシャフト、ギア、フレーム、装甲、電子機器、主機を原型をとどめない程カリツカリツに魔チューニングされた機体で荒馬の様な強引で力強い機動力だが愛宕の安定性や操縦性の良さが失われて居らず手懷ければ素直で無垢な少女の様に動いてくれる機体であった。

そしてそのパイロットこそ大日本帝国軍エースパイロットであった高路三良当時大佐……その人だった。

「アベンジャーワンよりアベンジャー各機へ！そろそろドイツの奴らとの合流ポイントだ！身嗜み整えておけよ？」

『こちらアベンジャーツー了解』

三良のすぐ後ろに待機する明るい薄紫を基調にシルバーのラインが入った機体……アベンジャーツー……南雲隊長だ、彼女が乗っている機体は第四世代機最強と言われていた。『Fze-15Dvスラストイーグル』を更にアイオビニクスや主機、ジェットエンジン等を改良したタイプであった

『Fze-15Esストライクイーグル』をライセンス生産と日本独自の改良を施した第4・75世代機『鳥海^{ちよつかい}』を南雲専用にカスタ

ムした『最上』と呼ばれる機体だった。

彼女は事務的ではあるがやはり修羅場を互いに潜り抜け且つ己を現在まで生かしてくれている隊長に対して柔らかな口調で返した。

『こちらアベンジャースリー、隊長当たり前の事を聞かんで下さい。』

『アベンジャーフォーよりアベンジャーワンへ、既にFCSを実戦モードに入れてます』

『……アベンジャーファイブ…了解…』

後続の三機…いや、三人からも返答が来る。

反応は多種多様だが実戦を怖がって居らず落ち着いて自分らしさを忘れていなかった…何時死ぬか分からず下座も上座も階級も関係無く平等に弾が当たる最前線では実戦を怖がり自分らしさを忘れ消極的になるのは最も危険とされていた…

（流石…と言うべきか……）

隊員の反応に三良は唇を微かに上げ笑みを溢し感心して。

「……来たな…」リーダーに映った機影に臨戦態勢を取るもIFF（Identification Friend or Foeの略／敵味方識別装置）が友軍を示し合流予定のドイツ軍所属特戦機隊であるのが分かり警戒を解き敵に傍受されないよう秘匿回線で無線を開き

「こちら日本帝国…第00特務試験隊アベンジャー隊隊長の高路三良だ…これからよろしく頼むぞ」

『…こちらは国防陸軍第8師団第18特殊戦闘機甲大隊シュヴァルツェ隊隊長オルベッド・シュミットだ…こちらこそよろしく頼む…』

…我が祖国の解放を願って…世界に平和をもたらすために……」

「ああ…その為に俺たちが居る……」

『…貴官とは気が合いそうだ……平和な時に会いたかったよ』

「全くだ…あんたとビールを飲みながら話したいよ」

『残念だ…さてそろそろロシアと中国の方々にお引き取りを願うとするか…』

「ああ！アベンジャー各機！行くぞ！」

『『『『WILCO（ウィルコノ 了解の意味）！』』』』

『シユヴァルツェ隊！全機出撃！』

『『『Ja（ヤーノ ドイツ語で了解の意味）！

全機の主機出力が戦闘出力まで上がりキィイイン！と甲高い音を響かせバックパックのメインスラスターに火が入り跳躍しベルリンに向け飛行して……

第三章：特務試験隊（前編）（後書き）

……はい、またも途中で終わりとなりました。
どうでしたか？過去編は？

では次回予告を…

アベンジャー隊はベルリンへと到着したがそこに立ちはだかった露
中同盟軍特戦機部隊…韓国の策略…アベンジャー隊の壊滅…そ
して新生特務試験隊…少年少女達は泥沼と化した最前線に身を投
じる事になる。

それでは次回をお楽しみに…

未来を切り開け！FOX TWO！（通常兵装を使用した事を伝える
無線用語）

……何となく決め台詞を言ってみた……

第四章：特務試験隊（中編）（前書き）

かゝああなり時間が掛かってしもうた！しかも若干ぐだぐだ感があるしゝ…後半省略が目立つし…
まあ、とりあえず…ご覧くださーい！

第四章：特務試験隊（中編）

2095年3月24日時間12時52分ドイツ首都ベルリン

『くそッ！こちら国防陸軍第七機甲師団第113戦車連隊！敵反撃熾烈！損耗率40%！』

『こちら第二師団第88対特戦機特技兵連隊！前線を維持できない！』

ドイツ国防陸軍主力戦車レオパルド5の連隊と対特戦機特技兵連隊が敵であるロシア軍と中国軍の特戦機師団に対抗するも敵特戦機の圧倒的な火力と重装甲の前に成す術が無く多大な損害を出し前線が崩れ始めて

（ヘッドクォーター）

『こちらHQ第113戦車連隊並びに第88対特戦機特技兵連隊、貴隊が後退すれば前線が崩壊する、連合軍の特戦機隊の到着を待て』
『こちら第88対特戦機特技兵連隊よりHQ！対特戦機APDS弾（装弾筒付徹甲弾）欠乏！対特戦機戦闘力40%に低下！作戦行動が不可能！』

『こちらHQ、第88対特戦機特技兵連隊：対特戦機HE弾（榴弾）はどうした？』

『そんなもん関節に当てないと意味が無い！』

『戦闘力がまだあるのならば防戦を再開せよ、以上通信終わり』

『あんにやろー！一方的に通信を切りやがった！……仕方ねえ！増援が来るまで現状を維持するぞ！弾種！対特戦機HE弾！てー！』

『第113戦車連隊各車！特技兵どもに負けるな！弾種！対特戦機APFSDS弾（装弾筒付翼安定徹甲弾）！撃ち方始め！』

同日時間13時28分ベルリン入り口

『アベンジャーツィよりワンへ…そろそろベルリンです』

アベンジャー隊とドイツ軍のシュヴァルツェ隊は高速でホライゾナルブースト（水平噴射跳躍）を行いベルリンへ飛行している。

『こちらH^{ヘッドクォーター}Q！アベンジャー、シュヴァルツェ各隊！前線部隊が壊滅の危機だ！急ぎ現場に急行せよ！』

「こちら、アベンジャーワン…前線部隊の状態は？」

『第113戦車連隊の損耗率60%なおも増加、第88対特戦機特技兵連隊は損耗率51%並びに弾薬欠乏の危機』

「こちらアベンジャーワン、了解した…前線の隊に後30秒で到着すると伝えてくれ」

『こちらHQ、了解した、彼らに伝える』

同日時間13時30分ドイツ首都ベルリン

『こちらHQより前線各隊へ…聞け……これより30秒後復讐者が現れる…繰り返す復讐者が現れる…以上だ』

『復讐者……日本のアベンジャーか！？』

『何！？アベンジャーだと！？』

『ようやくこのベルリンが…俺達の故郷が解放されるんだ!』

HQからの無線を聞いた第113戦車連隊や第88対特戦機特技兵連隊の隊員全員が驚きと喜びの歓声を上げた。

アベンジャー隊はそれだけの期待を背負っていたのだ。

同日時間13時30分30秒ドイツ首都ベルリン

「アベンジャーワンよりアベンジャー各機へ……行くぞ!」

『『『了解!』』』』

同日同時間ドイツ首都ベルリン
後方展開中のロシア軍特戦機大隊

『ん?……ッ!…隊長!』

『どうした?』

『て、敵特戦機接近!クラス…一個大隊と一個分隊!』

『なんだそれは?何故大隊と分隊が一つずつなんだ?』

『大隊はドイツの識別なのですが、分隊が……ジャパンインペリア

ル……………」

ロシア軍特戦機大隊の副官はその名を苦渋の表情で力無く呟く様に声に出し

『なに……………？……………日本…だと？……………まさか！？前線に展開している中隊を下げさせる！？』

『了解！』

前線展開中ロシア軍特戦機中隊

『本隊から通信？……………え……………と？貴隊ハソノ場ヨリ退避セヨ……………何があつたんだ？』

『中隊長！レーダーに敵特戦機を観測！分隊クラスと判明！物凄い勢いで突っ込んで来ます！』

『何ッ！中隊各機！FCSを対特戦機戦闘に切り換えろ！』

『くそッ！一機が異常な速度だ！8000km以上は出てる！どんなエンジンと装甲してんだよ！』

『各機散開！』

『りよ……………かッ！』

中隊長の指示で散開しようとした三番機の横を黒い何かが通り抜け

ると同時に三番機の上半身と下半身に分かれて爆散した。

『三番機が殺られた！クソが！』

四番機が即座にアサルトライフルを構えバババツ！バババツ！と三点バーストで射撃を開始

「…甘いな…！」

三番機を撃墜した特戦機は手に構えた日本刀型高周波振動破碎刀を構えながら弾丸を避け肉薄し先程同様に四番機を撃墜し

『……あれは…アベンジャー…狂鬼だ…狂鬼が来たんだ！中隊各機！退け！撤退だ！』

『うわッ！ウワアアアアア！』

『来るな！来るなあああ！』

中隊長機のスピーカーから断末魔と装甲がひしゃげ切り裂かれる不快な音、そして肉や骨が切り裂かれ血が噴き出す音が次々と流れて来た。

『クソ野郎……』

そして遂には中隊長機のみが残り三良の機体と対峙していた。

三良の機体はロシア軍中隊の機体から浴びたオイルや血で真っ赤になっていた……更に日本は急加速や超高速接近戦闘をするため電子機器を大出力な物にしていたが大出力となると排熱能力を高めねばならないため日本製の機体は緊急排熱用に開閉式の口を設けている、またその口に牙の様な物が付いていて敵特戦機の腕や頭を噛み砕い

たりが可能な程の攻撃力があつた……そして今その口が開いて冷却水が排気熱により水蒸気とかし白い煙を上げ口からまるで餓えた獣の様に冷却水をポタツポタツと垂らし中隊長機を睨んでいた。

『…化け物……クッソがアアア!!』

中隊長機は両手に保持されたアサルトライフル二挺とバックパツクのハードポイントに多目的背部マウントアームに装備された5インチ(127mm)三砲身ガトリングキャノン二基を前面に展開し全弾撃ち込む様にフルオート射撃をしアサルトライフルの35mm対特戦機高初速徹甲劣化ウラン弾をツーマガシン2000発とガトリングキャノンの127mm多目的高初速強化炸薬徹甲榴弾4000発を放つも第五世代機開発実験試作機『試製赤城』の強力な重力力場の前に弾かれ。

『……嘘だろ……?……そうだ……夢だ!これは夢なん……』

一気に加速し中隊長機を肉薄し一閃……上半身と下半身が綺麗に分かれ爆散……。

「……前に出たことを後悔するんだな……」

『……ピー!ガアー!ザザザ……こ……ら……シユ……アル……エ……強力……な……ECM……ECMが……機能……し……ない……』

「こちらアベンジャーワン!応答せよ!?どうしたんだ?」

『……こちら……シユアル……エ……敵UNKNOWN……接ぎ……うあああ……』

『隊長が…殺ら…た……クソオオ!……』

突然ドイツ軍のシュヴァルツェ隊からノイズ混じりの通信が入り問い掛けられるも反応が無くただUNKNOWNの言葉が聞こえたと思つた次の瞬間断末魔の様な叫びと共にレーダーからシュヴァルツェ隊の信号が消えて。

「…一体何が…アベンジャー各機!」

『『『『はい……』』』』

「…わかつてると思うが正体不明機がこの作戦区域に居るようだ…幸い我々の機体は準五世代機もしくは第五世代機並みの高い対ECM能力と高性能ECMのお陰で敵の電波妨害を受けていない…更に我が日本機特有のレーダー等の電子機器高さで敵の位置も粗方わかつているが、だ……我々にとって正体不明と言うのは払拭出来ない不安要素だ……心して掛かれ!」

『『『『ウィルコ!』』』』

『……敵は…倒す…じゃなきゃ……私は!』

『……こちらアベンジャースリー!急速で接近する物体有り!識別……韓国軍!』

『韓国だと?!ここに展開している部隊はロシアや中国だけじゃなかったのか!』

『こちらファイブ、フォー！落ち着け！敵はシュヴァルツエを倒したと言えど単機だ』

シュヴァルツエ隊を単機で全滅させた韓国軍の機体はアベンジャー隊の落ち着きを無くさせた、だがそんな状況下でも隊長である三良は異常に落ち着いていた。

「……アベンジャー各機！俺達の力を韓国の奴に思い知らせてやるぞ！」

『『……ッ！……了解しました！』』

「……ふっ……おい、ツー？応答が無いぞ？」

『……ふふ……流石は隊長だと思ひまして……』

「……これが俺の仕事だから……さて、お客さんを手厚く歓迎してやるか」

三良の言葉でアベンジャー隊の士気は向上した……しかし、彼らはまだ知りもしなかった……自分たちが撃墜される事を……

『……クソ！こちらアベンジャーファイブ！右腕を肩ごと持ってくれた！損傷率70%を超えた！』

『……流石……日本の準第五世代機……頑丈……だけど……もう終わり……』

『クソがあああ!』

最初に殺られたのは五番機だった…接敵して二分で右腕を肩ごとこつそり持つて行かれてそして流れるように突き出されたUNKNOWNのビームランスは五番機のコックピットを溶解させた…勿論、パイロットごと……。

『クソ!五番機の反応がI O S Tした!』

『……反撃される前に…殺る……』

『なっ!』

次の標的になったのは三番機だった……五番機から500は離れた距離に居たにもかかわらず接敵からまたも二分と掛からなかった…そして次は…四番機。

『嘘…だろ…?…こつも簡単に…かよ?悪夢だ…一体お前は何なんだよ…?…お前は!』

両足両腕の失った四番機の前に仁王立ちをするUNKNOWN機、手にはプラズマサーベルとビームランス…そして、プラズマサーベルを高々く振り上げ振り下ろす…機体は縦に真つ二つに断たれ爆散…アベンジャー隊はたった六分程度で三機も損害を出した…これは紛れも無い事実だった…そして更に追い討ちをかけるかのようにつ作戦司令部から『友軍の被害甚大、作戦行動に支障がある為各隊は至急後退』の命令が来た…それは国連軍の敗北を意味していた、友軍の士気は一気に低下し戦う気力を殺がれ消極的になりながら撤退を始めていた。……しかし、そんな状況に置いても未だに戦意を保つ所か戦意高揚している者が居た……

「…ふふ…これ程血がたぎる相手と出逢えるとはな……里奈！残存する部隊を率いて撤退しろ！殿は俺が務める！」

遠距離から支援狙撃をしていた忍に通信を入れて消極的な友軍の先頭に立つて撤退戦の指揮をするように伝え自分はUNKNOWNの相手をすると言つと黙って指示に頷いていた里奈が小さく呟く様に言つた

『…隊長…死なないで下さいね……』

戦士にあるまじき言葉…しかし、そんな里奈の言葉に三良は、

「ふっ…そう簡単に死んで堪るかよ…まだ昇も小さいんだしよ」

安心させるように笑顔で言いながらUNKNOWNへと飛んで行った。

「…隊長……」

三良の機体がモニターから見えなくなると小さく呟いてから自分も三良から与えられた『最後』の任務を完遂せねばと残存兵力を率いて撤退を始めた…里奈は既に気付いていたのだ…三良とはもう同じ空を飛べないことを……

同日ベルリン市街

「撤退を始めたか…上手く逃げ延びてくれよ……」

三良はUNKNOWN機と対峙していた…互いに傷付きながら……

先程まで凄まじいほどのドックファイトが繰り広げられ互いに右腕を損傷していた。

「…だが…ダメージはこっちの方がヤバいな……」

それもその筈、相手は先程出てきて弾薬やエネルギー、パイロットの疲労に余裕がある、しかし、三良の方はベルリンに入ってから戦い詰めで機体もパイロットも疲労困憊で今まで戦えたのが不思議な位だ。

「……これで最後だな……」

三良機は刀を構えそして……

「いざ！最後の勝負だ！」

UNKNOWNに突貫して行った。

ベルリン攻略作戦…失敗

友軍の損害甚大。

日本の特務隊『アベンジャー』の帰還機1

それが戦果報告だった……あまりに屈辱的な…この作戦以降日本は今までに無い強気な姿勢で米軍と共に欧州、アフリカ、アジアの国

々の解放に勤しんでいる。

(…って柄にも無く昔の事を思い出しちゃった……)

昇はボケケツと南雲の話を聞きながら昔の事を思い出していたが柄にも無いと頭を振り自分に帰る。

「以上が我々特務実験隊の概要だ、質問がある奴！」

昇が自分に帰ってる間に南雲の話は終わり質問の有無を尋ねた。

「はい」

昇が手を挙げると他の皆が昇に注目した。

「…なんだ高路候補生？」

南雲は昇を見ながら質問を尋ねた。

「はい、この特務実験隊は過去のアベンジャーの様に部隊名は決まっているのでしょうか？」

その昇の発言に南雲は小さく微笑んでから口を開いた。

「まだだ、部隊名は実働隊隊長…私の副官になる奴に決めてもらっ

「その副官はもう決まっているのでしょうか？」

南雲は質問に答えると昇は副官についても尋ねると南雲は頷いて見せた…そして。

「今質問に出たように貴様等に階級を与える！呼ばれたら返事をし
て前に出てこい！まずは、高上武蔵！」

「はいな」

南雲中將が名前を呼ぶと一人の少女が返事をしながら立ち上がった
高上武蔵：年は15歳、身長152cm性格は極めて温厚、戦闘時
のポジションはSAW（分隊支援）活発そうな顔つきと短めのポニ
ーテール、スレンダーな体つきと京都弁が特徴的な少女だ。

「貴様は中尉、ポジションはSAWだ」

「あたしが中尉？ほんまに？」

告げられた階級に武蔵は驚きを隠せないでいた、それもその筈大抵
は曹長からでどんなに成績が良かろうとも少尉又は准尉止まりだ、
それを行きなり中尉、中隊長クラスの階級だ驚くなと言う方が無理
な話である…まあ、流石と言えば流石だ……全員テストパイロット
扱いなのだから…

「次！西尾百合！」

「は、はい！」

次に呼ばれたのも少女だ…ぱつと見女が多いように見える…6対4
位か？などと考えてしまう

呼ばれた少女は西尾百合

見た感じは気弱そうだがポジションは驚く事にブリッツヴァンガ

ード（電撃前衛）だ…ブリッツヴァンガードとはストームヴァンガード（突撃前衛）やストライクヴァンガード（強襲前衛）など複数種ある前衛ポジションの中で最前衛のポジションで敵に切り込む前衛の先頭に立つ斬り込み隊長であり最も消耗率が高いとされそのためパイロット能力が高い者が選抜される。

「貴様は大尉だ…ポジションは今まで通りブリッツヴァンガードだ」「ほえ！？わ！わ私が大尉？そんなバカな！」

大尉：大隊規模の部隊または試験隊や教導隊の指揮もしくはそれを補佐する者が貰い受ける階級だ、驚いて当然だ……だが、何となく俺は理解した…それだけ重要で危険が伴うんだと……

（…ExperimentのX…か……）

今更理解した自分が馬鹿らしく自虐気味に苦笑したそして次々と階級とポジションが告げられてた…

高上武蔵：階級中尉、ポジションSAW

西尾百合：階級大尉、ポジションブリッツヴァンガード

遠藤美姫・美奈：この二人は最初にクラスに入った時にケンカしてた双子の姉妹、年齢は12歳、身長120代だとは思うが詳しくは不明。階級は中尉、ポジションフロントスリーパー

フロントスリーパーとは読んで字の如く前衛ポジションが突撃し易いように雑魚を掃除して花道を築くのが仕事。

黒井 碧：唯一自分が言い渡された階級に驚かなかった少女、美姫・美奈姉妹よりも更に幼い外見でパツと見て小学校1〜2年つて所だろう……ただどこだか近寄り難く暗い雰囲気を感じ出しているのを感じた、階級少佐、ポジションレイドファイター

レイドファイターは直訳すると襲撃戦士となりまさに敵の懷に飛び込み無力化するポジションである

防人千晴：ショートカットで明るい女の子のような……男……であ

る…正直女だと思っていたが…声だつて高い、顔立ちだつて女…一人称がボクつてだけで特に男だつて疑われないが紛れもない男だ…、階級は大尉、ポジションはストラテジオフェンサー

ストラテジオフェンサーとは直訳すると戦術将校で電子戦装備をした機体で空中管制や電子戦を行う現代戦で最も重要なポジションだ。

久瀬涼太…身長180弱の割とガツシリした体格のヤツだ、親は確か両方共軍人で父親は帝国海軍第五艦隊の提督で母親は第五艦隊所属の重巡洋艦の艦長だ、階級中尉、ポジションSAW

御崎雄馬…割と人懐っこい性格で身長が男のクセに140代と低身長の為小動物的扱いを受けるが本人は嫌がっていない、階級特技少尉、ポジションブラストインパクト

ブラストインパクトとは長距離支援砲撃と制圧砲撃を行うポジション

そして南雲中将が俺たち二人の方を向き

「次！高城賢吾！」

「ウッス！」

「貴様は長距離狙撃では一撃必中の命中精度を誇っているようだな？」

「はい！」

「先日の試験を見せてもらったが…時速1300kmで匍匐飛行する特戦機の胸部ブロックに当てるのは正直異常だよ…」

「あ、あはは…」

賢吾は乾いた笑みを浮かべるが南雲中将の言っていることは事実だ…いくらコンピューターの補助があるとは言え人間が音速で地面スレスレを飛翔する特戦機の胸部ブロックに当てると言うのは不可能な事だ…しかし、それを賢吾はやつてのけた…しかも何回も…そう…賢吾には異常な動体視力と空間把握能力が備わっているのだ…

「貴様は中佐だ！ポジションはスナイパー」

「ちちちち！ち中佐ああ！？」

「貴様の能力を評価した結果だ」

中佐の位を言い渡され半ば放心状態の賢吾を尻目に南雲中将は愉快そうな笑みを浮かべ。

「ふふ……今回は……今回は期待できるな……次！高路昇！」

「はい」

「ふふ……あなたを待つていた……いつか翼を無くした屈辱の地の空を飛ぶために……」

「……親父の刀を取り返しに来ました……」

「ふっ……はははは……流石は隊長の子供だけはある……お父さんの事を良くわかつて居るわね？」

「……ええ……親父は最後まで武人でしたから……」

「……刀は武士の魂……か……いいだろう！父の無念！欧州の地を解放し晴らして見せる！高路昇准将！」

「……准将……ふっ……任せて下さい！」

「貴様の階級は准将！ポジションは……ブラストヴァンガードだ！」
「ブラストヴァンガード……唯一親父だけがこなせたポジション……ブリッツヴァンガードよりも先に突入しスナイパーやブラストインパクトより後に撤退するポジションだ。」

……そうか……ようやく俺は親父の背中に触れることが出来た……指先だけだが確かに触れた……いつか親父のようになりたいと背中を追い続け……そしてそれが何時の間にか親父を超えたいと思っていた……かなりガキの頃にいつか親父のようになってそして超えたいと親父に言ったら物凄く喜んでたっけ？……俺が10歳くらいに親父はベルリンで散った……仲間の撤退を助けるために……周りのみんなは仲間の為に最後まで戦い散った英雄だの名誉の戦死だのなんだの言ってたが俺はそうは思わなかった……母さんにいくら仲間を守れても死んじゃ意味が無いと言ったらそうよと答えてくれたんだか親父もそうだと答えてくれたような気がした……だから俺は生きるために戦うと決意した……そして生き抜いて戦争を終わらせたいと思った……。（……見ててくれよ……親父……いつか思いっきり背中を叩いて追い越

してやるから！)

昇は窓から見える蒼天を見上げながら誓うのであった……。

第四章：特務試験隊（中編）（後書き）

…つとまあ、主要キャストも出揃ってきた所で本格始動！
今回もそれなりのミリタリー用語を散りばめました！
では次話はいつになるのかわかりませんが次回予告を！

これで本格始動の特務試験隊…パイロットに合わして開発された新
型試作実験機と試作特殊大型戦術輸送機、三胴型超々弩級戦闘航空
母艦が配備され改めて期待されてると理解する一同に初の出撃命令
が下り浮き足立つとは対照的な昇…

「…何かが起こるぞ………」

昇に過ぎった嫌な予感とは！？

未来を切り開け！フォックスツール！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1759f/>

閃光の果てに ~ Little Memorys ~

2010年10月10日03時30分発行